

3) 環境区分ごとにみた自然環境の特徴

(1) 自然環境・土地利用にもとづく環境区分

- 自然環境の特徴と問題点を整理するにあたり、本市の環境を、大きく「山」「里」「川」「まち」の4つに区分しました。

本市のおおまかな地形は、西部から中央部が山地、北東部と南東部が丘陵地、東部の台地が平地になっています。また東西を横切るように多摩川沿いの平地が連なっています。山地の大部分はスギ・ヒノキの人工林、丘陵地は二次林、台地や多摩川沿いの平地は主に市街地が広がっています。

こうした地形、植生、土地利用の違いによって、同じ本市内でも生き物の生息・生育状況に特徴がみえてきます。

これらの特徴に沿って、市内の環境をおおまかに整理すると「山」「里」「川」「まち」の4つに区分してとらえることができます（大区分）。それぞれの環境の特長は以下のとおりです。



あわせて、地形・水系に応じて、さらに詳細な区分を設け（小区分）、自然環境・生き物の特徴についての整理を行いました。

青梅市の環境区分

環境区分		各環境区分の地形・植生・土地利用の概要
大区分	小区分	
山	御岳山地域	御岳山とその周辺の標高 600m 以上の地域です。冷温帯落葉広葉樹（ブナ・イヌブナなど）が分布する地域を含みます。
	高水三山地域	高水三山とその周辺の標高 600m 以上の地域です。冷温帯落葉広葉樹（ブナ・イヌブナなど）が分布する地域を含みます。
	多摩川水系低山地地域	本市の西部、多摩川沿いの標高 600m 未満の低山地部の地域です。植生は主にスギ・ヒノキの人工林から成ります。
	荒川水系低山地地域	本市の北部、成木川など荒川水系の河川沿いの標高 600m 未満の低山地部の地域です。植生は主にスギ・ヒノキの人工林から成ります。
里	加治丘陵地域	本市の北東部に位置する加治丘陵の地域です。クヌギ、コナラなどの落葉広葉樹二次林に覆われた里山の環境です。
	草花丘陵地域	本市の南東部に位置する草花丘陵の地域です。クヌギ、コナラなどの落葉広葉樹二次林に覆われた里山の環境です。
川	多摩川河岸段丘・河川地域	多摩川および多摩川沿いの河岸段丘の地域です。おおむね本市の中央より上流側は渓谷です。下流側には河岸段丘が分布します。段丘沿いには崖線樹林がみられます。
まち	武蔵野台地地域	本市の東側に広がる台地・低地の地域です。主に市街地や農地として利用されています。霞川沿いの低地では、まとまった水田がみられます。

環境区分（大区分）

山
 里
 川
 まち



(2) 環境区分（大区分）ごとの自然環境の特徴

① 「山」の自然環境の特徴

<自然環境>

- 標高 600m 以上の御岳山・高水三山周辺のエリアは、秩父多摩甲斐国立公園に指定されており、ブナ自然林など都内でも有数の豊かな自然環境を有しています。
- 御岳山地域では、「七代の滝」「綾広の滝」など特徴的な地形がみられます。
- 標高 600m 以下の山の斜面の大部分は、スギ・ヒノキの人工林になっています。

<動植物の生息・生育状況>

- 標高 600m 以上の御岳山・高水三山周辺のエリアの自然度が高い落葉広葉樹林には、ブナ林に固有の種がみられます。谷沿いの溪流には魚類や水生昆虫を食べるカワネズミが生息し、ナガレタゴガエルなどの両生類が産卵地として利用しています。
- 標高 600m 以下の樹林を含む広い山地には、広大な行動圏を必要とする猛禽類（オオタカ等）や大型の哺乳類であるニホンジカ、ニホンカモシカをはじめ、多くの生き物が生息しています。また人里と接しているため、住宅地、耕作地、草地、竹林など多様な環境があり、タヌキ、アナグマなどの中型哺乳類もみられます。

② 「里」の自然環境の特徴

<自然環境>

- 市内には、多摩川の北岸側にあり、埼玉県入間市へとつながる加治丘陵と、多摩川の南岸側にある草花丘陵の、大きく2つの丘陵地があります。
- これらの丘陵地では、クヌギ、コナラなどの二次林に覆われており、谷津もみられます。
- 都内最大の「特別緑地保全地区」に指定されている「青梅の森」は、貴重な生き物の生息・生育空間となっています。
- 「青梅の森」および「大荷田（長淵丘陵）」は、多様で優れた二次的自然環境を有し、里地里山に特有で多様な野生動植物が生息・生育する場所として「生物多様性保全上重要な里地里山」に選定されています。

<動植物の生息・生育状況>

- 二次林の林床には、キンランが生育します。谷津の流れや湿地にはホトケドジョウが生息し、谷津の水田跡地の湿地は、トウキョウサンショウウオやヤマアカガエルなど両生類の産卵場所になっています。エノキはオオムラサキの産卵木になります。
- オオタカやキツネ、ニホンリス、ニホンアナグマなどは、丘陵地の林や周囲の環境を広く利用しています。

③ 「川」の自然環境の特徴

＜自然環境＞

- 多摩川は清らかな水質をもつ貴重な水源であり、流域の人々の暮らしを支えています。また、河原や崖線樹林と一体となった広域的な緑と水のネットワークの主軸としても重要です。
- 上流の山地部の溪流・岩場から、広い河原や崖線樹林を有する中流域まで、多様な環境がみられます。

＜動植物の生息・生育状況＞

- 多摩川にはアユ、ウグイ、カジカなどの魚が生息しています。
- 上流の岩場にはカジカガエルなどが生息し、ユキヤナギなどの植物も生育しています。
- 下流に広がる砂礫河原には、カワラノギク、カワラニガナなど河原特有の植物が生育し、イカルチドリなど水辺の鳥、カワラバッタなどの昆虫も確認されています。
- 崖線樹林は、サギ類の営巣環境として利用されています。

④ 「まち」の自然環境の特徴

＜自然環境＞

- 近年は市街化が進み、市内の台地の大部分は市街地です。一部に公園が点在します。
- 本市の東部には平地林や畑が一部残されています。
- 霞川沿いの低地では、まとまった水田がみられます。

＜動植物の生息・生育状況＞

- 市街地には、ムクドリやスズメ、ツバメなどの街路樹や家の軒下といった市街地の環境を利用することができる身近な鳥類が生息しています。
- 一部に残された耕作地や平地林、市街地に点在する公園緑地では、植物のキンランや、ツミなどの鳥類、ハタケノウマオイなど草地の昆虫類、カブトムシなど樹林の昆虫類がみられます。
- 霞川沿いのまとまった水田には、トウキョウダルマガエルが生息しています。

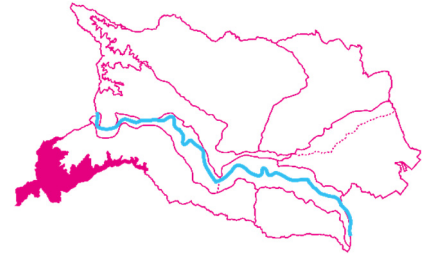
(3) 環境区分（小区分）ごとの自然環境の特徴

① 「山」の自然環境

(1) 御岳山地域

i) 地形・地質

御岳山地域は、本市の南西部にある鍋割山（標高 1,084m）、御岳山（標高 929m）、大塚山（標高 920m）、日の出山（標高 902m）の周辺、標高 600m 以上の地域です。



地質は、主に砂岩・礫岩・泥岩の互層からなる川井層、海沢層が分布しています。これらの基盤岩は急峻で標高が高い山地を形作り、谷は長い年月をかけて浸食されて溪谷状になっています。これらの地層の中には硬くて浸食に強いチャートが点在しており、奥の院の露岩地、「七代の滝」、「綾広の滝」などの特徴的な地形をつくりだしています。

ii) 土地利用や植生、植物の生育状況

御岳山地域には冷温帯の植生がみられ、山頂から尾根にかけては岩が多く、モミやツガなどの常緑針葉樹林が成立しています。その周辺には、ブナやイヌブナ、ミズナラなどの落葉広葉樹林があります。地形が急峻であること、武蔵御嶽神社の神域として保護されてきたことから、自然度の高い樹林が残されています。



御岳山

周辺の標高が比較的低い場所は、比較的傾斜も緩やかであることから昔から人に利用されていました。現在はミズナラ、コナラ、クリなどの落葉広葉樹二次林やスギ・ヒノキの人工林がみられます。

日当たりの良いゆるやかな稜線や斜面には、かつては茅葺き屋根の材料をとるために使われていた「萱場」の二次草原（人が利用することで維持されてきた草原）がありました。現在は小規模なススキ草地在長尾平や大塚山、日の出山につながる尾根にわずかにみられ、トダシバ、ワレモコウ、ツリガネニンジンなどの植物が生育しています。



七代の滝

〔写真提供：御岳ビジターセンター〕

谷は急峻な溪谷状で、カエデ類、フサザクラなどの溪畔林が連なり、ネコノメソウ類やコチャルメルソウ、ヒメレンゲなどの植物が生育しています。露岩地や滝などには岩場ではシロヤシオ、イワナンテン、タマガワホトトギスなどの植物もみられます。

iii) 動物の生息状況

御岳山地域は、西側が大岳山や御前山^{ごせんやま}などの山地に、東側は多摩川南岸の低山地や丘陵地につながっています。このため、広大な行動圏を必要とする猛禽類のクマタカや大型の哺乳類であるツキノワグマ、ニホンジカ、ニホンカモシカが生息しています。

自然度が高い落葉広葉樹林には、ブナ林に固有のチョウであるフジミドリシジミも確認されています。また、武蔵御嶽神社やその参道にはスギやヒノキの大木が多く生育し、大木にできた樹洞^{じゅどう}を利用するムササビ、ニホンモンガ、ヤマネなどの哺乳類や、フクロウが生息しています。

谷沿いの溪流には魚類や水生昆虫を食べる哺乳類であるカワネズミが生息し、ヒダサンショウウオなどの両生類が産卵地として利用しています。

御岳山地域で見られる動植物



レンゲショウマ
〔写真提供：御岳ビジターセンター〕



シロヤシオ
〔写真提供：御岳ビジターセンター〕



フジミドリシジミ
〔写真提供：原嶋守氏〕



カンタン
〔写真提供：八木下潤氏〕



ヒダサンショウウオ
〔写真提供：佐久間聡氏〕

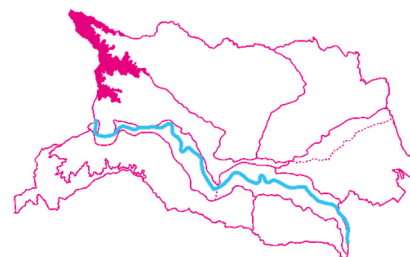


ムササビ
〔写真提供：御岳ビジターセンター〕

(2) 高水三山地域

i) 地形・地質

高水三山地域は、本市の北西部にある高水山（標高 759m）、岩茸石山（標高 793m）、惣岳山（標高 756m）の周辺、標高 600m 以上の地域です。

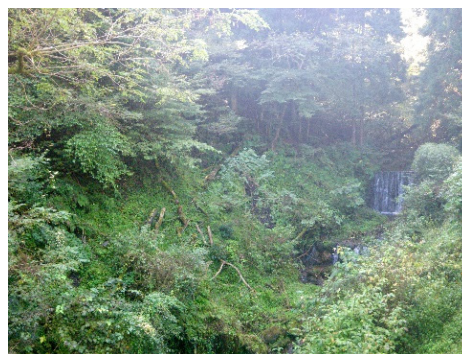


地質は、山頂やその北側は主にチャートからなる高水山層、南側は砂岩や泥岩からなる川井層が分布しています。チャートはとても硬い岩石であるため、高水三山山頂や成木川の源流にある黒山周辺の稜線は起伏に富み、露岩地が点在しています。

ii) 土地利用や植生、植物の生育状況

高水三山地域では、高水山頂の北斜面に小規模ですがブナやイヌブナ、ミズナラなど冷温帯の植生が残されています。また、山頂にある常福院の境内や参道にはスギの大木が多く生育しています。周辺では、比較的傾斜も緩やかであることから昔から人に利用されてきました。現在はスギ・ヒノキ人工林が多く、ミズナラ、コナラ、クリなどの落葉広葉樹二次林も点在しています。

谷は急峻な渓谷状で、谷底近くまでスギ・ヒノキの人工林が広がっていますが、一部にカエデ類やオオバアサガラ、アブラチャンなどの溪畔林がみられます。谷沿いにはウスヒメワラビなどのシダ類が繁茂し、湿った岩壁にはイワタバコ、カタヒバなどの植物がみられます。高水三山地域の植生は、ブナ、イヌブナなどから成る冷温帯の落葉広葉樹林が分布しています。



高水山ふもと

iii) 動物の生息状況

高水三山地域は、西側が棒ノ折山（別名 棒ノ嶺）、蕎麦粒山などの山地に、東側は多摩川北岸の低山地や丘陵地につながっています。このため、広大な行動圏を必要とする猛禽類のクマタカや大型の哺乳類であるニホンジカ、ニホンカモシカが生息しています。特にニホンジカは多摩川の南岸に比べてみられる頻度が高いようです。

自然度が高い落葉広葉樹林では、ブナ林に固有の昆虫であるヨコヤマヒゲナガカミキリや、奥多摩地域では分布の東限になるアカシャチホコなどの山地性の蛾類も生息しています。

谷沿いの溪流には魚類や水生昆虫を食べる哺乳類であるカワネズミが生息し、ナガレタゴガエルなどの両生類が産卵地として利用しています。また、渓谷に生育するトチノキを食草とするチョウの仲間であるスギタニルリシジミや、山間部の水のきれいな溪流に生息するムカシトンボもみられます。

高水三山地域で見られる動植物



ブナ

〔写真提供：御岳ビジターセンター〕



ヨコヤマヒゲナガカミキリ

〔写真提供：原島真二氏〕



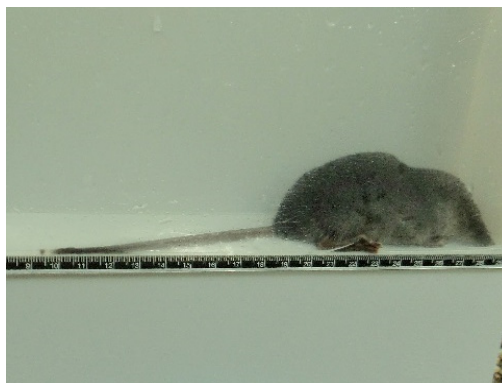
ナガレタゴガエル

〔写真提供：御岳ビジターセンター〕



クマタカ

〔写真提供：関根常貴氏〕



カワネズミ

(3) 多摩川水系低山地地域

i) 地形・地質

多摩川水系低山地地域は、本市の西部から中央に位置する多摩川沿いの低山地地域です。

多摩川南岸では「御岳山地域」の山麓に位置し、^{みむろやま}三室山（標高 647m）、^{うめがた}梅ヶ谷峠、^{まひきざわ}馬引沢峠、^{ふたつつか}二ツ塚峠まで連なる尾根を形作っています。東側はなだらかな「草花丘陵」につながっています。

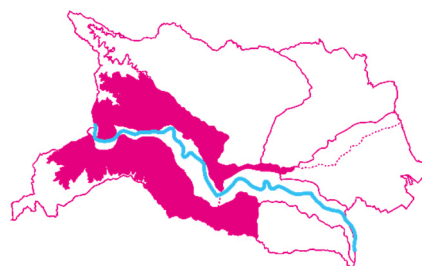
多摩川北岸では「高水三山地域」の南側の山麓に位置し、^{みかたやま}雷電山（標高 494m）、^{やぐらだい}三方山（標高 454m）、^{やぐらだい}矢倉台、永山丘陵まで連なる尾根を形作っています。この尾根は北側の荒川水系との分水嶺となっており、「荒川水系低山地地域」と接しています。東側はなだらかな「加治丘陵地域」につながっています。

地質は、主に砂岩・礫岩・泥岩の互層からなる川井層が主で、北岸の一部に雷電山層が分布しています。尾根や斜面は急峻で、谷も溪谷になっていますが、御岳山地域などの山地より、やや緩やかになっています。

ii) 土地利用や植生、植物の生育状況

多摩川水系低山地地域は、古くから青梅林業の中心地として植林が行われてきました。そのため、現在も大部分がスギ・ヒノキの人工林になっています。一部にはコナラ、クリなどの落葉広葉樹二次林がみられます。近年は、企業や団体の協賛のもと、東京都および東京都農林水産振興財団により「企業の森（花粉の少ない森づくり運動）」事業が進められています。この事業によりスギ・ヒノキが伐採された後に花粉の少ないスギなどの植樹が行われ、先駆種（伐採後などに生じる明るい環境を利用する種）となる草本などもみられる再造林地が点在しています。

谷沿いはケヤキやアブラチャンなどの溪畔林が分布しています。



多摩川水系低山地



企業の森

iii) 動物の生息状況

多摩川水系低山地地域は西側が「御岳山地域」、「高水三山地域」に、東側が「加治丘陵地域」、「草花丘陵地域」につながっています。このため、広大な行動圏を必要とする猛禽類のオオタカやノスリ、サシバ、大型の哺乳類であるニホンジカ、ニホンカモシカが生息しています。人里と接しているため、住宅地、耕作地、草地、竹林など多様な環境があり、タヌキ、アナグマなどの中型哺乳類もよくみられます。

大部分がスギ・ヒノキの人工林に覆われていますが、山麓に点在するエノキを産卵木として利用するチョウであるオオムラサキや、低山地に残されたマンサク林で産卵する山地森林性のチョウの仲間、ウラクロシジミもみられます。また、伐採地では開けた環境を利用する鳥であるヨタカも生息しています。

谷沿いの沢では、水生昆虫を捕食する鳥類であるカワガラスや、ヤマメ、カジカなどの魚類、カジカガエルなどの両生類、ムカシトンボなどの昆虫類が生息しています。沢が緩やかになったところではゲンジボタルもあちこちで見られます。

多摩川水系低山地地域で見られる動植物



ムカシトンボ
〔写真提供：杉村健一氏〕



カジカガエル
〔写真提供：佐久間聡氏〕



カワガラス
〔写真提供：関根常貴氏〕



ニホンカモシカ
〔写真提供：御手洗望氏〕

(4) 荒川水系低山地地域

i) 地形・地質

荒川水系低山地地域は、本市の北西部から中央北部に位置する荒川水系の成木川、北小曾木川、黒沢川沿いの低山地地域です。



「高水三山地域」の東側の山麓に位置し、成木川、北小曾木川、黒沢川沿いの尾根を形作っています。南側は雷電山(標高 494m)、三方山(標高 454m)、矢倉台、永山丘陵まで連なる尾根を分水嶺として、「多摩川水系低山地地域」と接しています。東側はなだらかな「加治丘陵地域」につながっています。

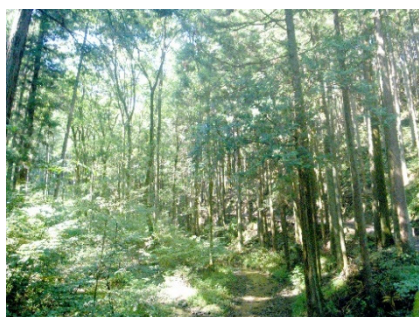
地質は、東側の成木川上流部は主にチャートからなる高水山層が、それより東側は砂岩や泥岩からなる雷電山層、さまざまな岩石が混在する成木層が分布しています。チャートはとても硬い岩石のため、成木川の上流部は尾根や斜面は急峻で、谷沿いも溪谷になっています。東側に行くにつれて、尾根も谷もやや緩やかになっていきます。この地域では古くから石灰が採掘されており、現在でも採石場が点在しています。

ii) 土地利用や植生、植物の生育状況

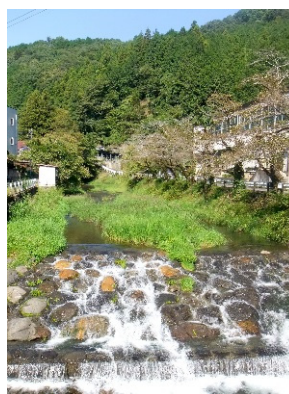
荒川水系低山地地域は、古くから西川林業の中心地として植林が行われてきました。そのため、現在も大部分がスギ・ヒノキの人工林になっています。一部にはコナラ、クリなどの落葉広葉樹二次林がみられます。

近年は、企業や団体の協賛のもと、東京都および東京都農林水産振興財団により「企業の森（花粉の少ない森づくり運動）」事業が進められています。この事業によりスギ・ヒノキが伐採された後に花粉の少ないスギなどの植樹が行われ、先駆種（伐採後などに生じる明るい環境を利用する種）となる草本などもみられる再造林地が点在しています。また、流域に点在する採石場では、裸地や草原が広がっています。

谷沿いはケヤキ、カエデ類などの溪畔林が分布しています。



黒仁田山林



成木川

iii) 動物の生息状況

荒川水系低山地地域は、西側が「高水三山地域」に、東側が「加治丘陵地域」につながっています。このため、広大な行動圏を必要とする猛禽類のオオタカやノスリ、大型の哺乳類であるニホンジカ、ニホンカモシカが生息しています。特にニホンカモシカは多摩川南岸よりも低い標高によくみられます。樹林地に点在する伐採地では、開けた環境を利用するヨタカも生息しています。人里と接しているため、耕作地、草地、竹林など多様な環境があって、タヌキ、アナグマなどの中型哺乳類もよくみられます。

谷沿いの沢では哺乳類のカワネズミ、水生昆虫を捕食する鳥類のカワガラスや、カジカガエルなどの両生類、ムカシトンボなどの昆虫類が生息しています。また、沢の最源流部ではタゴガエルの産卵がみられ、下流の緩やかになったところではゲンジボタルが生息するなど、沢の地形や環境に応じた多様な動物が生息しています。

荒川水系低山地地域でみられる動植物



スギ



クモキリソウ

〔写真提供：御岳ビジターセンター〕



ゲンジボタル

〔写真提供：八木下潤氏〕



モリアオガエル

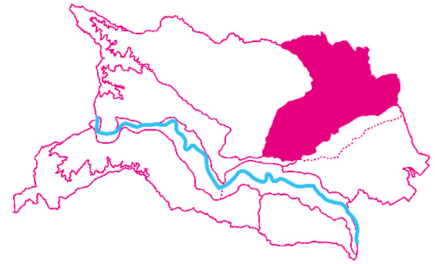
〔写真提供：御岳ビジターセンター〕

② 「里」の自然環境

(1) 加治丘陵地域

i) 地形・地質

加治丘陵地域は、本市の北東部に位置している霞丘陵、黒沢丘陵、成木丘陵を含めた区域です。標高はおおむね 300m 以下です。「荒川水系低山地地域」の東側に位置し、東側は埼玉県飯能市・入間市の丘陵につながっています。南側には霞川沿いの低地があり、「武蔵野台地地域」が広がっています。



地質は、北側に二本竹礫層・富岡礫層、南側に飯能礫層が分布しています。礫層は固い岩盤とは異なり浸食されやすいため尾根もなだらかで、成木川や黒沢川、その支川である小布市川こぶいちがわによって浸食された谷は緩やかな谷津を形作っています。これらの河川沿いには細長い低地が形成されています。なお、北側の二本竹礫層・富岡礫層は、風化があまり進んでいないため、南側に比べて谷の枝分かれが少なく、幅が狭いという特徴があります。

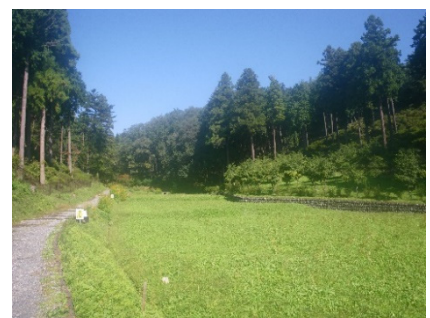
ii) 土地利用や植生、植物の生育状況

加治丘陵地域は、集落や耕作地も多かったことから、薪炭林しんたんや農用林、いわゆる里山として利用されてきました。かつては、草原や、樹木がまばらな林、アカマツ林が多くみられましたが、生活や農業の様式が変化したため、里山としては利用されなくなりました。その結果、アカマツ林は現在一部に残るのみで、クヌギ・コナラなどの落葉広葉樹二次林が多くなっています。また、スギ・ヒノキの人工林も分布しています。丘陵地のあちこちに神社や寺院があって、スタジヤスギ、ケヤキなどの大木も生育しています。



丘陵

クヌギやコナラなどの落葉広葉樹林には、シデ類、リョウブ、エゴノキ、アオハダなどの落葉広葉樹、コウヤボウキ、キンラン、リンドウ、カタクリなど林床に生える草がみられますが、落葉樹の明るい森から常緑樹の暗い森への移り変わりが進んだ樹林ではシラカシなどの常緑広葉樹が生長し、アオキ、ヒサカキなどの常緑低木が繁茂する樹林が増えています。



谷津

谷津はかつて水田として利用されていましたが、現在はごく一部が残るのみです。耕作されなくなった水田跡地は湿地や水路となって、ツルヨシ、カサスゲ、ミソソバ、セリ、カワモズク類など、湿った環境を好む植物が生育していますが、徐々に乾燥化が進んでいます。河川沿いの低地にも水田が点在し、サンショウモ、アブノメなどの希少な水田雑草もみられます。

iii) 動物の生息状況

加治丘陵地域は、西側が「荒川水系低山地地域」に、東側は埼玉県側の丘陵地につながっています。このため、広大な行動圏を必要とする猛禽類のオオタカやノスリ、大型の哺乳類であるニホンジカ、ニホンカモシカ、ニホンイノシシが生息しています。

人里と樹林地が混在しているため、耕作地、草地、竹林など多様な環境があり、タヌキ、アナグマ、キツネなどの中型哺乳類もよくみられます。神社や寺院の大木にある樹洞ではムササビやフクロウ、アオバズクなどが生息しています。一部に残るアカマツ林には、かつて多く生息していたセミの一種であるハルゼミがまだみられます。

谷津には水田や湿地、水路など多様な水辺環境が含まれており、このように多様な水辺環境が残された場所にはミゾゴイが生息しています。オギやツルヨシ、スゲなどの植物が生える湿性草原にはカシラダカ、ミヤマホオジロなどの鳥類やカヤネズミなどの哺乳類が生息しており、湿地にはヤマアカガエル、トウキョウサンショウウオ、アズマヒキガエルなどの両生類、モートンイトトンボ、シオヤトンボなどの湿地性のトンボ類、ヘイケボタルがみられます。水路にはホトケドジョウ、イモリも生息しています。

加治丘陵地域で見られる動植物



ヘイケボタル

〔写真提供：後藤洋一氏〕



ホトケドジョウ

〔写真提供：大久保芳木氏〕



オオタカ

〔写真提供：関根常貴氏〕



アナグマ

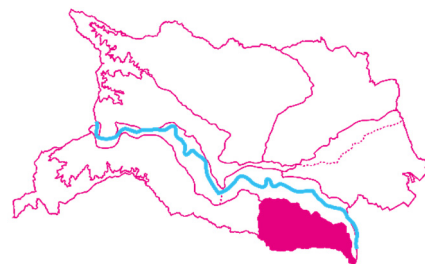


キツネ

(2) 草花丘陵地域

i) 地形・地質

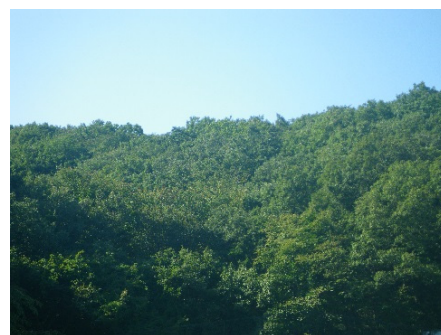
草花丘陵地域は、本市の南東部に位置しており、「長淵丘陵」や「大荷田丘陵」と呼ばれることもあります。標高はおおむね300m以下です。「多摩川水系低山地地域」の東側に位置し、南側はあきる野市や日の出町の丘陵につながっています。



地質は、主に大荷田礫層が分布しています。礫層は固い岩盤とは異なり浸食されやすいため尾根もなだらかで、^{とびす}鷲巣川や大荷田川などの河川によって浸食された谷は緩やかな谷津を形作っています。

ii) 土地利用や植生、植物の生育状況

草花丘陵地域は、集落や耕作地も多かったことから、薪炭林や農用林、いわゆる里山として利用されてきました。かつては、草原や疎林、アカマツ林が多くみられましたが、生活や農業の様式が変化して、里山として利用されなくなりました。その結果、アカマツは林としてまとまっているところはなくなり、クヌギ・コナラなどの落葉広葉樹二次林が多くなっています。また、スギ・ヒノキの人工林も分布しています。丘陵地のあちこちに神社や寺院があり、スギなどの大木も生育しています。



草花丘陵

クヌギやコナラなどの落葉広葉樹林には、シデ類、リョウブ、エゴノキ、アオハダなどの落葉広葉樹、コウヤボウキ、キンランなどの草本植物がみられます。また、北斜面側の一部では今も樹林の管理が行われ、まとまったカタクリの群落がみられます。しかし、植生遷移が進んだ樹林ではシラカシなどの常緑広葉樹が生長し、アオキ、ヒサカキなどの常緑低木が繁茂する樹林が増えています。

谷津はかつて水田として利用されていましたが、現在はごく一部のみになりました。耕作されなくなった水田跡地は湿地や水路となって、ツルヨシ、カサスゲ、ミゾソバ、セリなどの湿性植物が生育していますが、徐々に乾燥化が進んでいます。

iii) 動物の生息状況

草花丘陵地域は、西側が「多摩川流域低山地地域」に、南側はあきる野市・日の出町側の丘陵地につながっています。このため、広大な行動圏を必要とする猛禽類のオオタカやノスリが生息しています。近年になって、大型の哺乳類であるニホンジカやニホンイノシシもみられるようになりました。人里と樹林地が混在しているため、耕作地、草地、竹林など多様な環境があって、タヌキ、アナグマ、キツネなどの中型哺乳類もよくみられます。神社や寺院の大木にある樹洞ではムササビやフクロウ、アオバズクなどが生息しています。

クヌギ、コナラを主体とする落葉広葉樹林では、シジミチョウをはじめとするさまざまな蝶類が生息しています。また、オオムラサキは、樹液を出すクヌギやコナラが多く、幼虫の食草であるエノキが点在しているこの地域ではよくみられます。

谷津には湿地、水路など多様な水辺環境が含まれています。オギやツルヨシ、スゲなどの植物が生える湿性草原にはカシラダカ、ミヤマホオジロなどの鳥類が生息しています。湿地にはヤマアカガエル、トウキョウサンショウウオなどの両生類も生息しています。特にトウキョウサンショウウオは、草花丘陵が基準産地（新種として記載されるときに基準となる標本が採集された場所）になっています。

草花丘陵地域で見られる動植物



カタクリ
〔写真提供：御岳ビジターセンター〕



オオムラサキ
〔写真提供：藤嶋芳男氏〕



アオバズク
〔写真提供：関根常貴氏〕



トウキョウサンショウウオ（上：成体、下：卵塊）
〔写真提供：佐久間聡氏〕

③ 「川」の自然環境

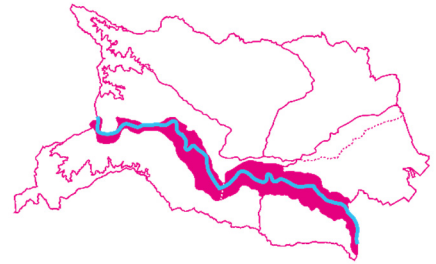
(1) 多摩川河岸段丘・河川地域

i) 地形・地質

多摩川河岸段丘・河川地域は、多摩川とその両岸に連なる河岸段丘を含む地域です。

多摩川は、市内西側(上流側)では御岳溪谷に代表される岩壁がつらなる溪谷の様相ですが、徐々に溪谷の幅が広くなり、砂礫質の河川敷が現れてきます。中ほどの^{まんねんぼし}万年橋をすぎるあたりから河川敷が広くなり、東側(下流側)の長淵、河辺町、友田町あたりではヨシ原や^{かほりん}河畔林を伴った広い河川敷が連なるようになります。

多摩川の両岸には^{かがんだんきゅう}河岸段丘があり、崖の連なり(崖線)と細長い平坦地(段丘面)が広がっています。東側(下流側)では複数の河岸段丘が並行しているところもあります。こうした河岸段丘の段丘面は多摩川によって運ばれた砂礫層が基盤になっています。こうした砂礫層が崖線にでている場所には湧水地もみられます。



ii) 土地利用や植生、植物の生育状況

多摩川は、市内西側(上流側)の溪谷ではケヤキなどの溪畔林が繁茂し、岩壁にはユキヤナギ、ウラハグサ、イワギボウシ、ヤシャゼンマイなどが生育しています。徐々に溪谷の幅が広がって、砂礫質の河川敷が現れてくるとツルヨシなどが河畔に生育するようになります。東側(下流側)の長淵、河辺町、友田町あたりではツルヨシやオギ、ススキなどの河川敷の草原や、ヤナギ類、オニグルミなどの河畔林が広がってきます。砂礫地にはカワラノギク、カワラニガナ、マルバヤハズソウなども生育しますが、ハリエンジュ、ノササゲ、オオブタクサなどの外来植物も増えてきます。河川沿いの低地はかつて水田として利用されていた場所もありましたが、現在はグラウンドや公園に変わっています。

多摩川の両岸の河岸段丘の崖線には、ケヤキやシラカシなどの斜面林が連なり、ところどころにスギの人工林もみられます。段丘面は古くから居住地や耕作地として利用されており、石垣も多くみられます。東側に行くにつれて市街化が進んでいて、耕作地はみられなくなっています。



多摩川



崖線樹林

iii) 動物の生息状況

多摩川河岸段丘・河川地域は、本市の中央部を東西に連なっていて、西側（上流側）では「多摩川水系低山地地域」に、東側（下流側）では北に「武蔵野台地地域」、南に「草花丘陵地域」に接しています。また、多摩川は上流側の奥多摩町、山梨県丹波山村、小菅村に、下流側は多摩地域を経て、東京湾へとつながっています。

多摩川の西側（上流側）は溪流環境で、カジカなどの魚類が生息するほか、アユやヤマメの放流が行われています。ヤマセミ、オシドリなどの鳥類も生息しています。東側（下流側）は流れが緩やかになり、アユ、ウグイ、シマドジョウなどの魚類が生息し、カモ類、カワウ、セキレイ類などの鳥類もみられます。カジカガエルは上流から下流まで広く生息しています。

河川敷の砂礫地はあまり植物が生育していない裸地になっていますが、鳥類のイカルチドリや、昆虫のカワラバタなどが生息しています。河川敷の草原にはカヤネズミや、クイナ、オオヨシキリ、ホオジロ類などの鳥類が生息し、河畔林にはサギ類のコロニー（集団繁殖地）もあります。

河岸段丘の崖線は樹林地が連なっていて、ニホンジカなどの大型哺乳類が移動経路として利用することもあります。大木も点在しているため、ムササビやアオバズクなどの樹洞を利用する哺乳類や鳥類も生息しています。また、点々と生育するエノキにはチョウの仲間であるオオムラサキが産卵していることもあります。

多摩川河岸段丘・河川地域で見られる動植物



ヤシャゼンマイ



カワラノギク

〔写真提供：三好ゆき江氏〕



カワラバッタ

〔写真提供：杉村健一氏〕



ウグイ

〔写真提供：大久保芳木氏〕



イカルチドリ

〔写真提供：関根常貴氏〕



カヤネズミ

〔写真提供：佐久間聡氏〕

④ 「まち」の自然環境

(1) 武蔵野台地地域

i) 地形・地質

武蔵野台地地域は、本市の東側に広がる武蔵野台地と霞川低地を含む平坦な地域です。

武蔵野台地は、多摩川が作り出した東京都と埼玉県に広がる広大な台地で、本市は武蔵野台地の最西端にあたります。霞川は武蔵野台地の北側を流れる荒川水系の河川ですが、河川沿いに低地が広がっています。

武蔵野台地は上総層群^{かすさそうぐん}を基盤として、火山灰などが分厚く堆積したローム層が広がっています。そのため、市域にある武蔵野台地には水辺環境がほとんどみられません。霞川沿いはローム層はなく、霞川が運んだ堆積物で覆われており、湧水や湿地もみられます。

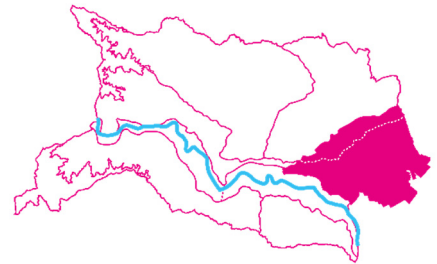
ii) 土地利用や植生、植物の生育状況

武蔵野台地は、乾燥した台地が広がっていて、かつては人家もまばらで畑地や平地林が広がっていましたが、現在は大部分が市街化され、住宅地や工場用地として利用されています。平地林の一部は瑞穂町や埼玉県入間市との境にわずかに残されており、クヌギ、コナラなどの落葉広葉樹二次林やアカマツ林が広がっています。キンランやササバギンランなどの明るい樹林に生育する植物もありますが、近年は樹林管理がされていないため、アズマネザサや、アオキ、ヒサカキなどの低木が繁茂する林が増えてきています。このほか、市街地には公園緑地が点在しています。

霞川は住宅地を流れるため、大部分が護岸^{ごがん}になっていますが、ミゾソバやヤナギ類など水辺の植物が生育しています。霞川低地には水田がみられ、そのうち藤橋・今寺・木野下にはまとまった水田が広がっており、ミズマツバ、コナギ、オモダカ、シャジクモなどの水田雑草が生育しています。

霞川低地と武蔵野台地の境には、標高差は小さいですが崖線があり、ケヤキ、クヌギ、コナラなどの樹林が連なっています。こうした崖線樹林は湿り気があって、ニリンソウなども生育しています。

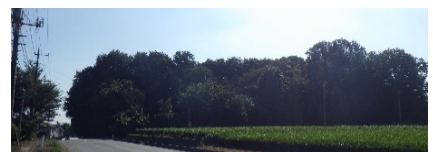
武蔵野台地や霞川低地には多数の神社や寺院があって、スタジイやスギ、ケヤキなどの大木も生育しています。



市街地



水田



平地林



市街地の緑地（平松緑地）

iii) 動物の生息状況

武蔵野台地は、大部分が市街化されているため、ムクドリやスズメ、ツバメなどの街路樹や家の軒下といった市街地の環境を利用することができる身近な鳥類が生息しています。一部に残された耕作地や平地林、公園緑地では、ツミやチョウゲンボウ、キジなどの鳥類、ハタケノウマオイやカンタンなど草地の昆虫類や、カブトムシ、シジミチョウ類など樹林の昆虫類がみられます。耕作地や平地林、住宅地が混在している場所ではタヌキやキツネなどの中型哺乳類も生息しています。

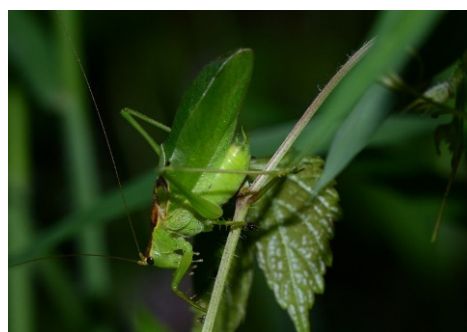
霞川ではカワムツなどの魚類、カワセミやカルガモなどの鳥類がみられます。霞川周辺の低地に広がる水田ではトウキョウダルマガエル、シュレーゲルアオガエルなどの両生類や、水生昆虫が生息しています。

武蔵野台地地域で見られる動植物



コナラ

〔写真提供：御岳ビジターセンター〕



ハタケノウマオイ

〔写真提供：杉村健一氏〕



トウキョウダルマガエル

〔写真提供：佐久間聡氏〕



ツバメ

〔写真提供：石塚文雄氏〕